

平成 30 年 6 月 23 日現在

機関番号：15501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12162

研究課題名(和文) 日中比較文学の影響分析における定量的方法の研究

研究課題名(英文) A Quantitative Study for Influence Analysis of Japan-China Comparative Literature

研究代表者

吉村 誠 (Yoshimura, Makoto)

山口大学・教育学部・教授

研究者番号：70141116

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究テーマである「日中比較文学の影響分析における定量的方法の研究」の研究期間3年中において独自に作成したプログラムを用いて語彙の比較を行い、その結果自然描写と情詩にテーマを絞って考察した。特に情詩においては、一連の文学史的流れがあること。『万葉集』においても同一の語彙を用いて類似の表現になっていることなどを特定し、「『玉台新詠』情詩と『万葉集』磐姫皇后歌に具体的にテーマを絞って立論した。情詩関係については、研究協力者である台湾淡江大学の馬銘浩教授と中国山東大学の肖霞教授と方法、内容を討論し、その成果を元に台湾で行われる国際シンポジウムで発表する予定である。

研究成果の概要(英文)：During three years' research period for the theme "A Quantitative Study for Influence Analysis of Japan-China Comparative Literature", we compared the vocabulary using the program we created independently to have investigated nature depiction and poetry. Particularly for the poetry, we focused on the flow of historical literature and the similar expressions using the same vocabulary as used in "Manyoshu" to have compared poetry of "Gyokudaishinei" and "Iwahimekogouta" of "Manyoshu". As for the poetry, we have discussed with the research collaborators, Professor Ming-Hao MA of Tamkang University and Professor Xia XIAO of Shandong University, and the research result will be presented at an international symposium to be held in Taiwan.

研究分野：国文学

キーワード：日中比較 玉台新詠 万葉集 コンピュータ

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 上代における日中比較文学研究においては、『万葉集』と『文選』を中心とした六朝詩文との影響関係はすでに論じられているが、語彙の使用頻度や種類の相違や共通性から見たきめの細かい比較研究はまだなされていない。特に和歌と詩文の構造や内容における比較は思潮や表層的な類似点の私的はあるが、一見異なった語彙や内容の比較についてはまだ十分であるとは言えない。

(2) 中国古典籍は多く電子テキストが作られている。また比較対象とする『万葉集』の電子テキストはすでに我々グループが開発した。しかし比較するための型式には整えられていない。

(3) 比較方法は、研究者の読解による直感的なことからの論証や同一語彙を中心とした文脈上の類似点の指摘にとどまっている。

(4) 比較するための総合的理論やコンピュータを利用した比較システムは、皆無である。

### 2. 研究の目的

(1) 基本的には『万葉集』を中心とした上代文学は、多くは古代中国文学の影響を受けている。必ずしもそうではない日本独自の自然観や人生観も持っているが、そのことと中国文化からの影響を腑分けし、どのような要素が中国文学からの影響であるのかを明らかにする。

(2) 比較の過程で構築される関係グラフとその諸性質およびグラフ理論に基づいたデータベースシステムは他のテキスト比較研究にも応用出来るものであり、そうしたシステムの構築とその応用理論を考える。

### 3. 研究の方法

(1) 『万葉集』と『詩経』から始まる『文選』『玉台新詠』収載の詩文を中心に比較し、事物、思潮、文学的視野、文化などの諸項目についてその影響関係の様相をとらえる。特に『詩経』から六朝時代に至る文学的な思潮や試作の類型を論じている中国の詩論書である『文心雕龍』『詩品』に解説されている諸点について検証し、『万葉集』との比較を通して、さらに詳細な影響関係を考察する。

(2) 比較プロセスで抽出される語彙や語彙構造をグラフ理論に基づく比較理論を構築し、単なる語彙一致や主題性だけではない構造的一致を比較する理論的方法や内容を構築する。

(3) 構築された理論に基づいて比較システムを作成し、コンピュータに実装して、検証

する。

(4) 中国の古典籍や『万葉集』の電子テキストとの間で使用語彙の使用頻度や抽出するために電子テキストを改編する。

(5) コンピュータを用いた語彙比較の方法を確立し、他作品での比較に応用出来るようにする。

### 3. 研究成果

(1) 抽出した結果をグラフ理論に基づいて検証した結果、自然詠における叙景描写の発達、恋愛詩における日中の共通点などの発見があった。また、将来は、中国の古典籍などのうち、日本語による検索が出来ない文献を扱えるようにするため、グラフ理論を用いた検索システムに関する技術を提案した。

(2) そうした全体的な傾向性を調査した中から七夕伝説と行事の日本への影響と、『万葉集』大伴家持の「君臣」表現、叙景の方法、情詩の『万葉集』における影響について主題をさらに細かく絞り込み、具体的に抽出されたデータを元の実証した。

(3) 七夕伝説と行事については、以下のとおりである。

牽牛織女逢会における二星は、すでに『詩経』に見えており、周時代には認識されていたことが知られる。西王母と東王公の男女二神の逢会信仰が原型であるとする論があるが、文献上は見られない。しかし道教によって七月七日の逢会伝説が成立していったことは確かなことであろう。

一方で後漢の崔寔の『四民月令』には織女星への祈願、聚会のことが記されており、この時代あたりから織女星を祀る行事が起きてきたことが知られる。やがて梁宗懐著の『荆楚素歳時記』では「乞巧奠」行事のことが見え、女性の裁縫上達の祈願として織女星を祀るという行事のあったことが知られる。またそれより以前に牽牛星のことも記されており、農耕にまつわる信仰のあったことが知られる。

そうした中で随から唐初にかけて日本からの遣使によって日本にこれらの行事と伝説がもたらされたと考えられる。しかし『古事記』には「たなばたつめ」という語で織女が歌謡に現れており、中国よりの伝播以前の歌謡であると認められるので、それ以前から存在していたことが伺われる。従って中国七夕における織女と日本の織女とが習合したことが知られる。

ただ『日本書紀』などには七月七日に何らかの行事があったことは記載されているが、中国の「乞巧奠」行事であったかどうかは明確でなく、『万葉集』の七夕歌は数多く残されているが、宮廷行事であったかどうかは不明

である。  
明らかに宮廷行事として明確になるのは、平安時代に入ってからであり、それまでの白馬の節会から「乞巧奠」行事が七月七日に行われるようになっていく。また平安中期には「七夕」を「たなばた」と訓む明確な文献が出てきており、それまでは「たなばた」は「織女」のみを指す言葉であったことが知られる。文学的な比較として、中国七夕詩は、織女がカササギの橋を渡り牽牛に逢いに行く構図で描かれており、運命的な隔絶を作者が嘆くという描き方が中心である。それに対して『万葉集』七夕歌は、牽牛が船で渡河する構図が基本となっており、一夜の逢会の最初から時間を追って、作者が牽牛、織女の立場で歌うものや第三者的立場で歌うという内容になっており、中国詩文と一致を見ない。おなじ語彙（織女、牽牛、天漢）などが両者に見られるが、その文脈や構図は相違していることがわかる。  
その理由に作品が作られる場の問題や習慣などが関わっていると考えられる。

(4) 次に調査結果を主題としてまとめたのが「君臣」表現である。

大伴家持が歌の中で天皇に対する忠誠心を示す表現は随所に見られる。これらのものは従来は大伴氏の氏族意識から来ているものと考えられてきていたが、詩経の「頌」と比較することによって、その性格が『文心雕龍』に見られる詩学的な表現性に基づくことが知られる。

中国文献との比較において、「皇」「祖」「畏」などをキーワードにして比較システムで検索をかけると、すでにデータベース化している『詩経』『文選』（著作権の関係で非公開）から該当する箇所が表示される。

『文選』潘安仁「關中詩」、『文選』陸士衡「主  
条目：皇太子謙玄園宣猷堂有令賦詩」、『詩経』魯頌「有駟」、商頌「那」などである。

そこで「頌」に注目すると『文心雕龍』には詩学立場からの解説があり、大伴家持はこの関係から天皇服従の表現を発していたことが証明出来る。

本論文は、そうしたことから単に伴造意識を表明する意識からではなく、中国詩学に学んだ家持の表現であることを証明したものである。

(5) 中国叙景詩の成立と『万葉集』の叙景歌（未発表）

自然の風景を叙述する「叙景」表現は、太康時代の謝礼運や謝惠連により確率されたとされる。一方で『万葉集』においては奈良時代にそれまでの国見表現から成立してきたと説かれている。

こうした「叙景」表現をめぐるあり方について、中国詩との共通性を確認しようとしたものである。『文選』と『万葉集』において両者のデータベースで比較すると「山」「河」

「鶴」「雁」といったキーワードが抽出される。それをさらに具体的な作品で確認作業を行うという方法で検証する。

その結果、自然景物に対する助手津は、中国詩は神仙に属する異世界として描かれることが多く、これは『万葉集』歌というよりも、『懐風藻』詩に多く見られるものである。ただ『懐風藻』詩は、公庭の場など天皇隣席や藤原史、長屋王といった人々の主催する宴席の場での詩が多く、一方で中国詩は、離群や独りといった野客のように宮廷から離れた隠遁的性格の場に多い。

これは対宮廷の中での遊仙の性格を有する中国文化の中で引き起こされた朝隠思想が影響しているものであり、『懐風藻』詩は宮廷の中で模倣しているものである。

一方『万葉集』には神仙的に自然物を描く方法が少なく、同じ叙景と言っても性格を異にしていることが知られる。この相違についてはさらに詳しく調査していく予定である。

(6) 次にテーマを求めた内容は、中国「情詩」と『万葉集』相聞歌との関わりである。中国においては『詩経』以来、夫婦が遠方で離れて暮らすことから来る恋愛詩が多くある。特に夫が遠征や長城築造のために徴用されるために遠方の夫を思う婦人の情の詩が多い。

『詩経』においては毛詩において、夫婦の義や為政者への批判を描くと解釈されているが、その他にも心変わりして別の女と暮らす夫への怨恨や遠方に行ったきり帰ってこない婦人の恋情などが描かれており、一般に「情詩」とか「怨恨詩」と呼ばれている。この詩の流れは、『玉台新詠』や『文選』など六朝時代にまで受け継がれていて、一連の文学史的な位置づけになっているとおもに、試作の主題ともなっていて詩学的な潮流が形成されているとも言える。

『万葉集』においては、夫が遠方に行った恋情を歌うことよりも、思う人が訪ねて来ない寂しさや恨みを詠んだものが多く、動機は中国詩とやや異なるが、表現性においては類似のものが多い。

「情詩」と『万葉集』歌との関わりはすでに多く論じられているが、それをデータベース化することによる比較調査の結果、次の主題を精査することとなった。

それは『万葉集』磐姫皇后歌の中に遠方に行った夫（天皇）を追いかけて行きたいという表現に「山尋ね」という句があることである。もちろん作者は後に仮託されたものであって、原歌は情詩発想になっていることはすでに指摘されている。

「山」をキーワードとして『詩経』『文選』を調査すると、夫が万里の長城建設、修理に徴用されていることが浮かび上がってくる。特に『文選』の「馬上飲酒行」は他に多くの情詩に影響を与えた詩であるが、この詩は『詩経』の影響を受けているばかりでなく、

万里の長城での課役のつらさを夫側と妻側から歌ったものであり、妻側の中国の中原地域から見ると、「山」の長城へ行ったという場面が確認出来、夫の課役が長ければ長いほど妻の嘆きが詩を読む者にとって同情を買い、為政者に対する怨嗟が強くなるという構造を示している。  
この「山」に着目すると、詩の意味は変化しているとは言え、「山尋ね」と付合する。  
この論は、現在台湾での国際シンポジウムで発表すべく準備中である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

吉村誠,殷善培,中国七夕の日本における受容, 共著, Journal Of East Asian Identities, Vol/1, 2016.3 査読有

吉村誠 大伴家持の「君臣」表現 - 「頌」からの視点 -, 単著, 山口大学教育学部論叢, 66巻1部, 2017.3 査読無

児玉啓彰, 鷹多穂実, 山本怜子, 中田 充, 葛 崎偉, 吉村 誠, 古文書画像検索システムのための類似部分グラフ検索手法の改良, 電子情報通信学会技術研究報告, Vol.116(525), pp.29-34, 2017.3 査読有

[学会発表](計 0件)

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

#### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

吉村 誠 (Yoshimura Makoto)  
山口大学教育学部教授  
研究者番号: 70141116

#### (2) 研究分担者

葛 崎偉 (Ge Qi-Wei)  
山口大学教育学部教授  
研究者番号: 30263750

中田 充 (Nakata Mitsuru)  
山口大学教育学部教授  
研究者番号: 60304466

#### (3) 連携研究者

なし( )

研究者番号:

#### (4) 研究協力者

馬 銘浩 (Ma Ming-Hao)  
肖 霞 (Xiao Xia)